
デザートバイキング 『アッフォガート』

桜沢 純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デザートバイキング 『アッフオガート』

【Nコード】

N1592G

【作者名】

桜沢 純

【あらすじ】

双子の姉妹、ソラとウミ。両親を亡くした二人はお互いを支え合いつながりながら暮らしてきた。しかしある日、姉のソラが恋人を連れてきた。ウミの心が揺れ動く……ほんのりGL短編集『デザートバイキング』シリーズ。

「ウミ。この人が、お付き合いしてるスグルさん」

「……ご、こんにちわ」

「はじめまして。本当に、ソラとそっくりだね」

「それは、そうよ。だって双子だもの」

お姉ちゃんが、恋人を連れてきた。

背の高い、美術の石膏像みたいな顔をする人。確かに格好良かった。

お姉ちゃんはボクと同じ顔だけれど、柔らかい長い髪と、優しい笑顔。すごく美人。

ボクはお姉ちゃんと同じ顔だけれど、少しくせのあるポニーテール。子供っぽい。

「それじゃ、スグルさんがお姉ちゃんと結婚したら、ボクのお兄ちゃんになるわけだ」

「ちよつと、気が早いわよ、ウミ」

「あはは。その時はよろしく、ウミちゃん」

「こちらこそ、お兄ちゃん」

胸がざわついた。

きつと、これから、ボクは辛くなる。

三人でテーブルを囲んで、お姉ちゃんが作ったごはんを食べながら、楽しいひととき。

お兄ちゃんはとてもいい人で、頼りになって、面白くて、すぐに好きになった。

お姉ちゃんが好きになった人なら、ボクも好きになるって、わかってた。

だけど、きつと、ボクは辛くなる。

ちっちゃい頃、ボクはすごく泣き虫で、いつもお姉ちゃんの後ばっかり追いかけてた。

ボク達は生まれつき身体が少し弱くて、お姉ちゃんは時々病院に行くくらいだった。ボクは時々熱が出るくらいで、だけど、お姉ちゃんがいないと眠れなくて、一緒に病院に行ってた。

お姉ちゃんは身体が弱くてもしっかり者で、活発で、明るくて、いつも笑顔だった。

そう、あの時も、笑顔。

その日、お姉ちゃんが検査入院で病院に一泊することになった。

お父さんがお姉ちゃんと。ボクはお母さんとお留守番。

「ウミ。お姉ちゃん明日には帰ってくるんだから。寝てたら、すぐだからね?」

「うん……」

お姉ちゃんに言われて、ボクはお気に入りのクマのヌイグルミを抱きしめる。

「ほら、ウミ。お母さんがホットケーキ作ってあげる。一緒に作りましょう?」

「ソラ。行くよ」

お母さんがボクの。お父さんがお姉ちゃんの手をとって、ボク達は玄関のドアの向こうとこっちに離れていく。

「やだー!! あたしもお姉ちゃんと一緒に行くーッ!!」

「あ、ウミッ!!」

ボクはお母さんの手を振り払って、玄関から飛び出す。雨が降っていたけれど、カサもささずに走っていった。門を開けて、道路に飛び出した。

「あ……っ」

「ウミッ!!」

キイイイイッ!!

目の前に光。それは車のヘッドライト。
固まっているボクの身体を、抱きしめて……

「ソラ！ ウミー！！」

「いやあっ！！ ソラあッ！！」

ボク達を避けようとした車は、塗れた路面でスリップして、壁に
激突した。

その、車の破片が。

「あ……ああ……おねえちゃんっ！！」

お姉ちゃんの、お腹に、刺さっていた。

刺さつて、真赤に、血が、溢れて。

「ウミ……大丈夫？ 怪我はない？」

お姉ちゃんは、ニッコリ笑つて、ボクの頭を撫でてくれた。

お姉ちゃんは、命に別状はなかったけれど、お腹に、消えない傷
ができてしまった。

ボクのせいで。

泣き虫ウミのせいで、お姉ちゃんのお腹に。

ごめんなさい、お姉ちゃん。

ごめんなさい、お姉ちゃん。

ボク、いい子になります。

ボク、強い子になります。

それから、ボクは『ボク』になった気がする。

それから、数年後。

ボク達の両親が、事故で死んでしまった。

二人で、何日も泣いた。

おじいちゃん達が『ウチに来るか？』と言ってくれたけれど、ボ
ク達は二人で、この家で暮らすと言った。

お姉ちゃんはショックでゴハンも食べられなくなって、ずっと泣
いていた。

その背中を見て、ボクは思った。

今度は、ボクがお姉ちゃんを助けるんだって。

それから、毎日、毎日、ボクは掃除も、洗濯も、苦手な料理もした。

お姉ちゃんは、少しずつだけど、ごはんを食べるようになって、ちよつとずつ、笑うようになってくれた。

「ウミ……強くなったね」

お姉ちゃん言葉に、ボクは泣いた。

泣き虫ウミはそう簡単にはなならないけれど、少しは強くなれたんだって。

いつも、お姉ちゃんとお揃いにしていた髪を、ポニーテールにしたのは、この日からだった。

そして、現在。

お兄ちゃんは、しょっちゅうウチに来るようになった。

「うーん……顔とか声とかはそっくりなのに、何で料理の味はこんなに違うんだろう」

「なーに。文句あるんだつたら食べなくていいんだよ？」

お姉ちゃんは病院の検査が長引いたので、今日は帰れないと連絡があつて、ボクとお兄ちゃんは二人でごはんを食べていた。

「いや、美味しいよ？　ただ、ウミの味付けは、ソラと違って濃いついか、なんというか」

「美味しいならいいじゃない。男が細かいことをグチグチ言わない！」

「はい。すみません」

そんなやりとりをしながらご飯を食べ終わると、お兄ちゃんが「ーヒーを入れてくれた。」

「はい。ウミは砂糖三個だっけ？」

「せいーかい。よく覚えてるね」

「……もうすぐ、ほんとに妹になるからな」
「……」

二人でソファに向かい合わせに座って、コーヒーをすすする。
「来月、結婚することにしたよ」

「そっか……おめでと」

「ありがとう……それで、さ。ソラの体調もあるし、俺は一人暮ら
しだし、ウミさえよければ、俺もこの家で暮らそうかって、ソラと
話してたんだ」

「ふーん……いいんじゃない？ 部屋も余ってるし」
ズキン。胸が、痛い。

「だけど、ボクは精一杯笑顔を作って。」

「そ、そっか……ちよっと、安心したよ」

「なんで？ ボクが反対するとも思ってた？」

「い、いや、お前ら、仲いいからさ……なんか、ちよっとな」

苦笑するお兄ちゃん。ボクは、変な顔にならないように頑張る。
「でも、うん。お兄ちゃんがいてくれると助かる。庭の木も随分伸
びちゃったし」

「え、俺、雑用係！？」

二人で、笑う。

「んじゃ、ボクはちよっとお姉ちゃんに着替え持っていくよ。お兄
ちゃんはお風呂でも入ってくつろいで。留守番よろしく」

「え、あ、ああ。送っていかなくて平気か？」

「そんな子供じゃないよ。行ってきます」

ボクは用意しておいたおねえちゃんの着替えの入ったバッグを持
って、玄関のドアを開けた。

「あれ……？」

突然、涙が零れた。

「お姉ちゃん」

「あ、ウミ。ありがとう」

「具合は？」

「ぜーんぜん。何ともないのに入院なんて、最悪。退屈で退屈で、余計に具合悪くなるよ」

お姉ちゃんはくちびるを尖らせて、バタバタと両足をばたつかせる。最近お姉ちゃんは、何だか子供っぽくなった気がする。きつと

……お兄ちゃんがいるから。

「スグルさんは？」

「留守番してもらった。今頃お風呂入ってるんじゃない？」

「……話、聞いた？」

お姉ちゃんが、恐る恐る感じて尋ねてきた。少し、不安そうな顔。お姉ちゃんがそんな顔するのは珍しくて……なんか、昔のボクみたいになって、思った。

「うん。おめでと。最近物騒だし、男の人がいてくれると、安心だよね」

「ウミ……ありがとう」

お姉ちゃんが、ボクの手を握って、微笑んだ。

胸が、ズキンと、痛くなった。

「あ。ウエディングケーキ、ボクが手作りしてあげようか？」

「え、ちょ、ウミ、まともにケーキ作れたことないじゃない！」

あははって、笑った。

そっか。

お兄ちゃんがいてくれるなら、ボクはもう、いなくてもいいんだな。

うちに帰って、お風呂に入って、鏡を見ながら思う。

髪を下ろせば、お姉ちゃんと同じ姿。

同じ顔。同じ髪。同じ……傷痕。

右の脇腹に、傷痕。

お姉ちゃんが、私をかばってくれた次の日。お姉ちゃんが怪我をした同じ場所に、突然傷痕ができていた。

双子だから？

わからないけれど、この傷痕が、ボクを強くしてくれていた。

けれど、もう、ボクがいなくなったら、お姉ちゃんを守ってくれる人がいる。

大好きなお姉ちゃん。

大好きなソラ。

大好きな……。

急に、寂しくなつて、怖くなつて、お風呂場で泣いた。

泣き虫だったころに戻ったみたいに、シャワーを浴びながら泣いた。

「結婚おめでとう。お兄ちゃん。お姉ちゃん」

「ありがとう」

「ありがとう、ウミ」

結婚式。お姉ちゃんはとってもキレイだった。

「髪……切ったんだね」

「うん。似合ってるでしょ？」

首をかしげるボクに、ウェディングドレスのお姉ちゃんは、そうですね、って笑った。ちよつとだけ、寂しそうに。

「大人っぽくなったじゃん」

「コラコラ、ボクに惚れたらいけないよー？」

お兄ちゃんも、格好よかった。

結婚式前日。ボクは髪を切った。

鏡の中からお姉ちゃんが消えていった。

心の中に、ぽっかりと、大きな穴があいた。

「これからも、よろしくね」

そして、バイバイ。

ボクのお腹から、傷痕が消えた。

(後書き)

あまりGL要素はありませんが。
タイトルと合わせてお楽しみ頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1592g/>

デザートバイキング 『アッフォガート』

2010年10月8日13時16分発行